中信教育事務所生涯学習課だより

第 26号

マナビィつうしん

令和4年３月17日(木)

社会 教育

１年間のコミュニティスクールへの取り組みを振り返って
～市町村コミュニティスクール担当者会議より～

２月22日（火）、市町村コミュニティスクール担当者会議をオンラインで開催しました。前半は県文化財・生涯学習課の楠指導主事からコミュニティスクール推進についての説明と、長寿社会開発センターと学校・地域がともに取り組んだ事例を紹介していただきました。その後、長寿社会開発センターの方に、センターの取り組みと今後のコミュニティスクールへとの連携に向けた関わり方のお話をお聞きしました。

後半は、３つのグループに分かれて「事業のまとめ」を使って情報交換をしました。50分間の情報交換、10分間の意見発表の後、各グループで学んだことを全体共有し、非常に充実した情報交換になりました。大事な部分をまとめたものを掲載しますので、ぜひ来年度のコミュニティスクール推進のヒントにしていただきたいと思います。

情報交換の記録から

○情報提供は大事！　学校職員と委員が話し合える工夫を！

・学校側から、委員の皆さんに学校の様子を知ってもらいたいという取組が増えてきた。授業参観日に運営協議会を行い、職員と委員が話し合う等工夫をしている。これにより、**委員が学校のことを理解しよう**という、質の高い発言が増えてきた。

・協働本部は生涯学習課、地域、ＰＴＡすべての緩やかなネットワークで進めていかなくてはいけない。

・**学校と運営協議会長のコミュニケーションが大事**、校長・教頭・教務主任・コーディネーター、会長２人で集まって意見交換を２時間ぐらい行った。お互いの思いを共有するために、これがよかった。

○コロナ禍だからこそCSができること！

・地域教育協議会を集められなかった。地域の皆様に挨拶をしたいと、**手紙を送ったり、ビデオで感謝を伝えたり**等工夫をしている。

・もしＣＳがなかった状況だったら、学校とＰＴＡと地域が離れていたのではないかと思う。**「学校に入りやすくなって、助かる。」**と言われた。話し合いは、形式的な話し合いではなく熟議を大事にしようとした。**「熟議・協働・マネージメント」**が大事。コロナ禍でもやめるのではなく、**できることを話し合って学校と地域で突き合わせて進められる。**

・ＣＳの活動として、コロナ禍の中でもよかったのは、桔梗小学校キッズお仕事チャレンジ。昨年までは学校に来てもらってブースをつくった。コロナだから、外に出て、低学年から高学年の希望者で地域の学区を回って歩いた。できないじゃなくてどうしたらできるか、キッズお仕事用の実行委員会があって、夜集まって話し合って決めた。**大人が子どもたちに背中を見せた。**

○地域で育つ、地域が育てる子どもたち

・子どもたちの放課後の学習や遊びの見守り支援を行っている。１回 100 名を超えたことがあり、支える方が手いっぱいになっている。来年度**松本大学の学生に支援**に入っていただく予定。

・伝統産業やお祭りについて、関わる地域住民が指導にあたっている。20 年取り組まれており、なくてはならないものとなっている。大人から中学生まで力を借りないと祭りができないと、中学生の力を頼りにしている。**子どもも村の伝統を守っていく意識**が育っている。

・中学の道徳のゲストティーチャー。**郷土を愛する心と生きる力について考える授業**を年６回位置付けて教育委員会で講師を探して紹介する。ここ５年間取り組んでいる。

・地域の思いが子どもたちの支えになっている。育っている子どもたちが、卒業していくときに、12 年間ここで育ったことが大きな力となっている。**子どもが成人して地域に戻ってきたとき、この地域をどう思ってくれるのか、これからが楽しみ。地域の生きがいにつながってくるし、これからもつなげていきたい。**

○地域のこと、CSの活動、どうつなげていく？

・中学生の総合の時間「神城断層地震、白馬の奇跡、死者０、被災者から話を伝承しよう」ということで、地区の復興状況を見たり、改めて被災者から話を聞いたりした。中学生は７年前のことは記憶にあまりない。父母から伝え聞いてはいるが・・・。**私たちの役目として、伝承していくことが大切。**

・ＣＳで活動してきたことを**学校の財産として残していくことが大事。総合の学習教材のように見える形で表されている**ことで、関わる人が変わっても継続していく。地域に発表する場があり、**子どもたち同士も先輩のやってきたことをあこがれの気持ちをもって継承している。**

・**継続させていくためには、組織化、ネットワーク化**が大事。

○「楽しい！」が基本！どのように地域と学校がコミュニケーションをとるか

・６年前、信州型を取り入れたときから、現場の先生方に負担感を持たせない、ということを考えてきた。**新たな取り組みとして取り入れると負担感があり、継続性がネックになる。**現場に負担感がないような外部講師をお願いするなどしてきた。

・先生方とのコミュニケーションをどうやってとるのかが大事。**温度差を埋めるために。**

・学校が忙しくて、地域の方の受け入れが引いてしまっている。学校に受け入れてもらうためには、どうしたらよいか。

→（文生）**子どもの育ちを学校職員に紹介する。子どもを中心に説明していく**とよいのでは。

・**先生方も地域住民も「楽しい」と感じているか**が大事。小さな積み重ねが大切。やっていく取組で子どもたちの笑顔、地域の笑顔に先生方にも気づいてもらいたい。

「計画したり準備したり、大変なこともあるんだけど、
その向こうにすごく楽しいことが待っている。」

情報交換の最後にこんな意見がありました。楽しいことは持続しますし、大人が楽しんでいる姿を子どもたちに見せていく、というのは子どもたちにとって大きな学びにつながります。そのためにどう参加してもらうか、どのように協働活動を充実させていくか、そのヒントをたくさんいただいた担当者会でした。

各市町村・学校のCSや社会教育がより充実したものになるよう、今後もお手伝いさせていただきます。